

唐土と南蛮の交錯

—近世日本の宇宙観を巡って—

パリ・ディドロ大学大学院生
サイジ・モンテロー ダニエル

近世日本の思想史上、西洋に関する学問、いわゆる「洋学」は南蛮学と蘭学の二つに分類することが可能だ。南蛮学は戦国時代後期、キリシタン時代とも呼ばれる時代にポルトガルの商船が西欧・日本間の貿易を独占し、ポルトガル王権を代表するイエズス会が日本各地で活躍したことにより普及した。日本で南蛮系宇宙論が盛んになったのはこの時期である。しかし江戸時代になり、天草一揆鎮圧後にポルトガル人は日本から追放された。その結果、南蛮系学問の影響力は弱化し、出島に駐在していたオランダ人がますます重要な役割を果たすようになった。以降、西洋に関する学問はオランダ通詞（長崎で幕府に仕える通訳者）から伝わる学問、すなわち蘭学と号する。

西欧からの学問を受け入れたことで、日本における地理学・天文学の技術はそれ相応に変化した。一方で日本人学者の宇宙観が一朝一夕にして急変したわけではない。むしろ、南蛮学・蘭学由来の天文学や航海術はポルトガル・オランダの別なく、ただ漠然と蛮夷の学問として軽んじられることが頻繁であった。そもそも本来、日本においては漢字文化圏における天文学は占いの技術と密接に結び付いていた。のみならず、天に発生する現象と身体機能は同様に陰陽五行説に従って解釈することができた。近世日本の思想は雑多な思潮から構成され、唐土伝統の道教・儒教、仏教や朱子学、さらには日本固有の信仰も重要な位置を占める。そこに南蛮・蘭学系宇宙観が加わったことで、近世学者の思惟は非常に複雑なものとなった。

拙論では江戸時代中期の宇宙観を体現する西川如見の天文学・暦術の著書『天文義論』及び『両儀集説』を概略する。如見は貿易港・長崎に住む町人として、中国と西欧の両方からの知識を受容できる特権的な地位にあった。面白いことに、如見は著書の中で朱子学に基づいた理論を展開する一方で、南蛮人が伝えた地図製作法の要素をも採用している。つまり近世日本の天文学者にとって、宋学的な自然哲学と西欧からの天文学的・地理学的な技術は相容れないものでは決してなく、むしろ共存すると考えられた。

しかし、西川如見の著書にも見られるように、近世日本の天文学者は陰陽五行説に固執し、あくまで唐土伝統の思想の優越を強調した。西欧科学の技術は認めても、それらは天地万物の根本的な道理には至らない、浅薄な知識と断じたのだ。

拙論では西欧と漢字文化圏の科学的思考を対照して、近世日本に於ける外来思想の流布を研究し、それにより日本の宇宙観に新たな角度からの光を当てたい。